

歴史 探訪



「芭蕉も涙した 乙和の椿」の物語

笈も太刀も 五月に飾れ 紙幟



芭蕉の句碑 頃はあたくも五月節句(医王寺の)寺室の弁慶の笈も義経の太刀も出してきて紙幟(共に飾らう)ではないか」と、芭蕉は万感の想いを込めて詠みました

元禄二年(1689)旧暦の5月2日、俳聖・松尾芭蕉は、奥の細道」の道中、飯坂・医王寺で、笈も太刀も 五月に飾れ 紙幟」の句を残し、飯坂の地で二度も涙を流しました。奥の細道六百里の道中で、芭蕉が涙をこぼしたのはただの四回(後は平泉と金沢で一度ずつ)。何がこれほどまでに芭蕉を涙させたのか。医王寺にある、「乙和の椿」にまつわる、哀しく美しい物語」を、郷土史家・秋山政一さんと医王寺住職・橋本龍弘さんにお話を伺いながら、追いかけてみました。

古人を訪ねる、芭蕉の旅

俳聖・松尾芭蕉の珠玉の作品「奥の細道」。天下の名文といわれるこの古典は、今日に至るまで永く広く愛読されています。芭蕉が細道の旅を思い立ち、江戸の千住を歩き出したのは旧暦の3月27日。それから旅の終着駅である大垣まで、約五カ月にわたる大旅行でした。

芭蕉は、細道の旅で歌枕・名所・旧跡を訪ね歩こうと志していました。その道程は、日本の文学伝統の中にとつぱりかつかり、先人が訪ね歩いた地に立つて、そこから聞こえてくる、「古人の声」を敬虔に聞こうとした旅でした。そんな

な最期を遂げました。兄・継信は四国・屋島の合戦で義経の身を守るため、わが身を盾として矢を受けて主君を助け、帰らぬ人となりました。一方、弟・忠信は、平家滅亡後に頼朝と不和になった義経が京都・堀川で苦況に陥った時、義経の装束を着て応戦し、これまた身代わりとなって戦死しました。そして父・基治も、攻め寄る頼朝の軍勢と戦って命を落としたのです。「これらのことを、芭蕉はすべて知っていました」と、秋山さんは語ります。悲劇の英雄・義経を追慕する民衆の一人であった芭蕉にとって、西行も訪ねたという佐藤一族のもとに向かうことは念願だったでしょう。

感動の極みとなった飯坂の地

医王寺住職の橋本さんは、「奥の細道の旅で、芭蕉が二度も涙を流したのは、飯坂の地だけなんです」と話します。芭蕉は、丸山・大鳥城に居を構えていた佐藤庄司の館を訪ね、義経に身命を託した佐藤一族の悲劇の想いを、思わず涙しました。そして一族が眠る菩提寺、医王寺では、継信・忠信兄弟の戦死を悲しむ老母・乙和御前を慰めようと、兄弟の奥方、若桜と楓が自らの悲しみをこらえて甲冑を身に着け、兄弟凱旋のさまを演じたという言い伝えを聞き、その健気さに再び涙を流しました。義経説話に重い位置を占める佐藤一族の、その本拠である丸山と菩提寺を、万感の想いをもって訪ねた芭蕉が、このことを、中にも一人の嫁がするし、先哀也。女なれどもかひがひしき名の世に聞こえつるものかと袂をぬらしぬ」と、感動の極みに達した慟哭の表現をもって記したのは、当然のことでした。この時、芭蕉の胸の中には、義経と老母・乙和の姿が去来したことでしょう。芭蕉の二度の涙とは、「義経と乙和の魂が



念願だった佐藤一族の菩提寺・医王寺の地に立った芭蕉は、参道の木立を見上げながら、何を思ったのでしょうか



この佐藤継信・忠信の墓をはじめとする一族の墓は、奥の院薬師堂の傍らに立ち並んでいます



この山門をくぐり佐藤一族の忠誠心と孝心に想いを馳せる人々の姿は今も絶えません



乙和の深い悲しみと母情が乗り移ったかのように、花開かずには落ちてしまう椿の木。いつしか人はそれを、「乙和の椿」と呼ぶようになりました



飯坂・波来薬師の近くにある「乙和の清水」。乙和が二人のわが子を想うたびに訪れ、自分の顔を写してはわが子に会った想いをして城に戻ったと言われることから、「姿見の清水」とも呼ばれています



乙和の椿の前にたたずみ、「古人の声」に静かに耳を傾ける秋山さん(左)と住職の橋本さん

流した涙」であったのかもしれない。二人の息子の無事の帰りを、乙和は待ち続けました。しかしその想いは、ついに届きませんでした。「継信・忠信兄弟が戦死したのは、年こそ違いますが、ともに冬の時期。当時のことですからその哀しい知らせが乙和に届いたのは、おそらく暖かい春になったころだったのではないのでしょうか」と、秋山さんは推察します。

「乙和は厳しい冬を耐え、二人のわが子を想うたびに近くの清水に行き、自分の顔を清水に写してはわが子に会った想いをして城に戻ったんです。それほどまでにひたすら待っても、ついに届くことなかった想い。そんな乙和の悲しみと母情が乗り移ったかのように、佐藤基治と乙和夫妻の墓碑の傍らには、つほみ

のままで開かずには落ちてしまつ椿があります。そして人々は、これをいつしか「乙和の椿」と呼ぶようになりました。永い時を経て巨木となっても、花咲くことのないこの椿には、乙和の想いが生き続け、その深い悲しみを訴え続けているのでしょうか。「乙和の心の声」は、今なおここに、さまよっています。

伝え続けたい、家族の愛と絆

三百年余り前、飯坂の地に立った芭蕉には、そんな「心の声」が、はつきりと聞こえていたに違いないと推察します。それは、歴史や伝統の中にしっかりと身を置き、聞こえつる心がある者にのみ聞こえる声なのでしょう。そしてその心は、

地元・福島で確かに受け継がれ、いま、さらに大きくはぐくまれようとしています。

平成7年の「ふくしま国体」で、佐藤一族の物語が、県民創作オペラとして上演されました。その名も、「乙和の椿」。秋山さんは、「この上演にあたっては、佐藤一族にまつわる史実や椿に関する言い伝えの確認などのお手伝いをしました」と、当時を振り返ります。そして今年2月、地方文化の発信を目指して、このオペラの東京での再演が、晴れて実現しました。そこで演じられたのは「乙和の椿」に秘められた、哀しいまでに美しい家族の愛と絆。それは、たとえ時は移り変わっても守り続けたい大切なものとして、これからも、わたしたちの心の中に生き続けることでしょう。